

○ 活動報告

■ 会員制情報誌「たのし」にて「いしかわ」発信

氏名：西島 幸夫 職業：経営コンサルタント（ISO取得支援） 都道府県：東京都

時折り、小さな会員制情報誌「たのし」に「いしかわ」を発信しています。

この11月号は鈴木大拙館を紹介しました。

小生の特使としてのささやかな活動の一端です。

掲載された記事はこちらです

[鈴木大拙館（金沢）.pdf](#)



禅を世界に広めた 鈴木大拙の館を訪ねる

いしかわ観光特使 西島 幸夫

洋の東西結ぶ大拙の事績

兼六園を散策した後、近くの「鈴木大拙館」を訪ねることを楽しみにしている。5年前に鈴木大拙（1870～1966）の考えや思想を伝えるため、生地のおすぐ傍の本多町3丁目に開設された。大拙は日本よりも世界的に知られる仏教学者であり、「Zen」の思想を世界に広めた第一人者だ。記念館と付

けないのは、過去の人物として追憶するのではなく、大拙の生き方・考え方について今に生きる人々に何かを感じてもらいたいからだ。アメリカでは大リーグのスズキ・キイチローが知名度ナンバーワンの日本人だが、以前は鈴木大拙が最もよく知られていた。

展示棟は翁の思想を知るための簡潔な展示と写真や全集が並べられているだけである。「学



鈴木大拙館 水鏡の庭に建つ思索空間



水鏡の庭に安らぎ 時を忘れてしまう

習空間」は大拙の心と思想を学ぶ書が閲覧できる静閑な場だ。中庭へ出ると、白い壁と回廊に囲まれて水を湛えた「水鏡の庭」が広がる。背後に本多の森の緑が美しく映えている。水鏡の庭を臨む禅堂を模した席に黙坐していくと、雑念を減却した無の境地に入れるかもしれない。自然に心が和らぎ時の経つのも忘れてしまふ。それぞれ自らが考える「思索空間」である。大拙を知らない人にも気軽に来て頂き「ここはいいところだ」と思ってもらっただけでもいいと、猪谷聡学芸員は謙虚に仰る。

大拙は明治3年生まれ、第四高等中学校入学、哲学者西田幾多郎と同級生。21歳で上京、帝大哲学科選科で学び、鎌倉円覚寺に参拝する。27歳の時渡米し、シカゴで東洋哲学、仏教書の翻訳・雑誌の編集に従事し、後に創刊した英文機関紙で仏教思想を世界の識者に発信した。79歳（1949年）から10年以上の間、欧米を回り精力的に講演・講義をした。健康法を尋ねると「わしは、健康法を特に考えないが、いつも未来のことを考えている。あれをしなくてはならぬ。これをしなくてはならぬとね。」と答えている。今年没後50年、Zenへの関心はいまも世界的に高まっている。



文学碑第1号 徳田秋声文学碑

徳田秋声の文学碑を設計した。城下町を象徴する土塀の壁面に秋声の筆跡を刻んだ銅版がはめ込まれている。文学碑第1号である。「文学碑」という名称は戦後に生まれた言葉だが、氏の造語だろう。人心荒廃し食うや食わずの敗戦間もない時代に文学碑を建てた関係者の熱意に驚かされる。後年、吉郎の設計で親交篤かった室生犀星の文学碑が犀川右岸に建てられた。吉郎は犀川の近くで生まれ、清流に耳を傾けるとなつかしい童心が胸にこみ上げるといふ。犀川はいまも美しく流れている。

大拙の言葉に真摯に向き合う

私事ながら高校生迄本多町の近隣に住んでいたため、鈴木大拙は卒業した金沢市立新野町小学校の大先輩だ。昔から仰ぎ見る郷土の偉人として敬われてきた。先年、母校を訪ねる機会があつて、校長室に通されると大拙の「平常心是道」と揮毫した扁額が掲げられていた。平常心とは、目的をもってつきますことなく行の道ではなく、当り前の普段通り、構えないで何の計らもないようにスツと出てくる意識、無意識である意識だといふ。深い言葉に触れてもつと多くのことを学びたいと思つた。

（この項おわり）